

PRE!

2020 Vol.2

Valetta / Matera

欧州文化首都を経て、
変貌を遂げる街。



RE

Contents

RE: Valletta / Matera	FEATURE	
欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。		04
RE: Search Detroit デトロイトがたどり着いた、縮退時代の都市デザイン	NEXT ISSUE	20
RE: Study URBAN SPORTS COMMUNICATION / 金魚湯・栃木	INTERVIEW	22
RE: View 欧州文化首都とひとりひとりの変化	COLUMN	26

Cover: スリマ地区よりヴァレッタを望む

人は都市の中で暮らし、働き、学び、移動します。

それらの淡々とした日々の活動に、豊かな潤いをあたえてくれるのが、文化・芸術のひとつの役割であることは間違いありません。

ドイツの文化相がCOVID-19によりもたらされた経済の混乱期において、「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ。特に今は」と述べたことは印象的でした。その経済効果が見えにくい文化・芸術は、人間が生きていくうえで欠かすことのできない滋養であり、「無用の用」的存在ではないでしょうか。

『RE:』vol.2では、文化・芸術、そしてスポーツによる都市再生事例を取りあげました。

オリンピックの起源である古代ギリシア時代の「オリンピア祭典競技」は、神に捧げる宗教行事としてスポーツだけでなく文化・芸術も競い、人々を熱狂させてきました。古今東西、文化・芸術・スポーツは、人々の心を鼓舞し、日常に潤いをあたえてきたのです。

今回の特集では、市民一人ひとりが文化・芸術に接することで得た“気づき”の輪が、都市を再編していく過程をレポートしています。私たちはそこに、じわじわと、しかし着実に効いてくるソフトパワーの本領を見出しました。

混迷する今の日常においてもそれらは必ず力を発揮するだろうと、改めて考えさせられる特集となりました。

太田 あゆみ

RE:

Valletta / Ma

欧州文化首都

Impacts of European Capital of Culture

文化の相互理解を目的とした「欧州文化首都」は、日本を含む世界中からアーティストや文化人が集まり、一年にわたって様々なプログラムが催される。都市と人をいかに変えるのか。

「真のヨーロッパ統合には、お互いのアイデンティティとも言うべき、文化の相互理解が不可欠である」という提唱により、1985年に発足した「欧州文化首都」。ヨーロッパの文化大臣会合のオりのアテネ空港で、ギリシャの文化大臣メリナ・メルクーリ（当時）とフランスの文化大臣ジャック・ラング（当時）が、悪天候のため遅れていたフライトを待つ間にコンセプトを話し合い、そこから始まったと言われている。選定された都市では、一年間を通して様々な芸術文化に関する行事が開催される。数多くの日本人アーティストや文化人が参加するなど、日本との関わり合いも深い。発足当初は各国の首都など、欧州を代表する都市が選ばれることが多かったが、近年では都市成長の契機となることを企図して、知名度が低いながらも中長期的な観点で人々の暮らしをより良くしようという意欲に溢れ、努力をしている都市が選ばれる例も多い。

2018年に欧州文化首都を経験し、「地中海の宝石」とも謳われる島国マルタの首都に相応しい、活気溢れる街となった城塞都市ヴァレット。そして、取材時（2019年）の欧州文化首都開催地であり、かつてその住環境から「イタリアの恥」とまで言われた洞窟住居が象徴的なマテーラ。今回の特集では、普通の観光ではその景観にばかり目が行きがちなる二都市が、欧州文化首都を通してどのような変容を遂げたのか、特に人々の意識の在り方や変化について、現地での取材をもとにレポートする。

Text 永山 友也 TOMOYA NAGAYAMA

1982年大阪府生まれ。2007年読売広告社入社。現在、データドリブンマーケティング局に在籍。これまで、大規模企画開発のコミュニケーション方針策定や、エネルギー会社のマーケティング戦略立案などを担当。現在はデベロッパーの新規事業プロモーションなどに参画。都市ラボ所属。

取材協力：EU・ジャパンフェスト日本委員会



マテラ近郊で取材した欧州文化首都のプログラム『アルトフェスト』の一演目。霧の中でパフォーマンスをするダンサーと、静観する周辺住民。

atera



欧州文化首都を経て、姿貌を遂げる街。

List of European Capitals of Culture

欧州文化都市・欧州文化首都の一覧

欧州文化都市

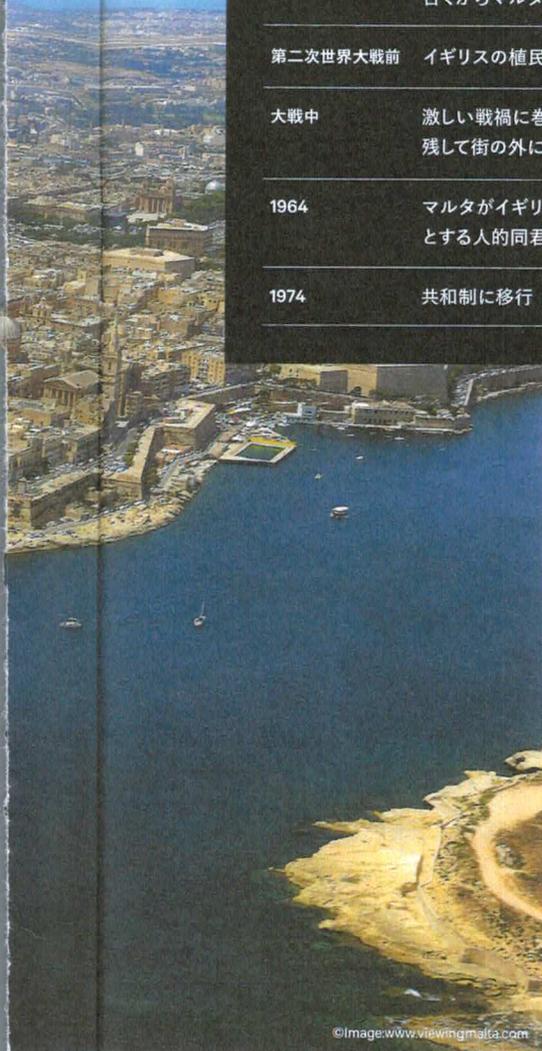
1985	アテネ (ギリシャ)	1992	マドリッド (スペイン)
1986	フィレンツェ (イタリア)	1993	アントワープ (ベルギー)
1987	アムステルダム (オランダ)	1994	リスボン (ポルトガル)
1988	ベルリン (ドイツ)	1995	ルクセンブルグ (ルクセンブルグ)
1989	パリ (フランス)	1996	コペンハーゲン (デンマーク)
1990	グラスゴー (イギリス)	1997	テッサロニキ (ギリシャ)
1991	ダブリン (アイルランド)	1998	ストックホルム (スウェーデン)

欧州文化首都

1999	ワイマール (ドイツ)	2012	ギマランエス (ポルトガル) マリボル (スロベニア)
2000	ブリュッセル (ベルギー) アヴィニョン (フランス) サンティアゴ・デ・コンポステーラ (スペイン) ポローニャ (イタリア) ベルゲン (ノルウェー) クラクフ (ポーランド) ヘルシンキ (フィンランド) レイキャヴィーク (アイスランド) ブラハ (チェコ)	2013	マルセイユ (フランス) コシツェ (スロバキア)
2001	ロッテルダム (オランダ) ポルト (ポルトガル)	2014	ウメオ (スウェーデン) リガ (ラトビア)
2002	サラマンカ (スペイン) ブルージュ (ベルギー)	2015	モンス (ベルギー) ブルゼニ (チェコ)
2003	グラーツ (オーストリア)	2016	サン・セバスティアン (スペイン) ヴロツワフ (ポーランド)
2004	リール (フランス) ジェノヴァ (イタリア)	2017	オーフス (デンマーク) パフオス (キプロス)
2005	コーク (アイルランド)	2018	レーワルデン (オランダ) ヴァレットタ (マルタ)
2006	パトラス (ギリシャ)	2019	マテラ (イタリア) ブロヴディフ (ブルガリア)
2007	シビウ (ルーマニア) ルクセンブルグ (ルクセンブルグ)	2020	ゴールウェイ (アイルランド) リエカ (クロアチア)
2008	スタヴァンゲル (ノルウェー) リヴァプール (イギリス)	2021	ティミショアラ (ルーマニア) エレウシス (ギリシャ) ノヴィ・サド (セルビア)
2009	ヴィリニユス (リトアニア) リンツ (オーストリア)	2022	カウナス (リトアニア) エシュ=シュル=アルゼット (ルクセンブルグ)
2010	ルール (ドイツ) ペーチ (ハンガリー) イスタンブール (トルコ)	2023	ヴェスプレーム・バラトン (ハンガリー)
2011	トゥルク (フィンランド) タリン (エストニア)	2024	タルトゥ (エストニア) ザルツカンマーグート (オーストリア) ボードー (ノルウェー)

Valletta chronology ヴァレッタ年表

1565頃	マルタ大包囲戦直後、聖ヨハネ騎士団がシペラス半島上に新都市建設を決定 古くからマルタの首都として機能	1979	イギリス海軍の撤退が完了 海軍が去ったことで職を失った人々の流出が進む
第二次世界大戦前	イギリスの植民地時代、海軍の駐屯地として栄える	1990-2010頃	ヴァレッタ以外で生まれた人や外国人、アーティストなど、一部の人がヴァレッタに移住し始める
大戦中	激しい戦禍に巻き込まれ、一部の貧しい人々を残して街の外に移住が進む	2010-2011頃	ヴァレッタの芸術文化のインフラ整備に資金が投入されはじめ、アート活動が盛んに
1964	マルタがイギリスから独立、エリザベス2世を女王とする人的同君連合となる	2012	Valletta2018開催決定
1974	共和制に移行	2018	Valletta2018開催



©Image:www.viewingmalta.com



日常的なヴァレッタの風景 [筆者撮影]

落ぶりは、ヴァレッタ住民に対する偏見すら生まれるほどだった。

衰退の歴史を辿るヴァレッタだが、1990年代になると、ヴァレッタに住んでみようという人が現れ始める。ヴァレッタには再生すれば見違えるような歴史資産がたくさんあり、そこに目を付けた人々が、家賃の安さも手伝って移り住んできた形だ。「アーティスト」と呼ばれる人たちは再生途上にあるエリアを好む傾向にあるが、そういった人たちが増え始めたのもこの時期だ。とは言えヴァレッタの建物は古く、保全に必要な公的資金も十分ではなかったため、廃墟同

然の場所も多かった。ヴァレッタで何かを始めようと思っても、基本的には今ある建物を改装しなくてはならず、余計にお金がかかるといった状況で、「わざわざ行かない場所」からの脱却はできなかった。転機が訪れたのは2010年頃。国会議事堂やオペラハウスなど、インフラや文化組織の整備に資金が投入され始めたのだ。2012年に欧州文化首都のヴァレッタでの開催が決定するまでの間、それらのインフラ整備に伴い、街中でのアート活動も盛んになり始めたという。文化首都が開催されたから街が活性化したのではなく、文化首

都の開催に向けて街全体が一丸となる大きなムーブメントがあった、という見方が正しいであろう。

欧州文化首都は開催「国」が先行して決定し、その国の中でいくつかの都市が候補補、審査を経て開催都市が決定する。マルタにおいては、欧州文化首都そのものが国にとって初の経験であったこと、そして、劇場や美術館など芸術文化のインフラがヴァレッタに集中していたことなどから、政府としても是非ヴァレッタで開催したいという強い思いがあったと言われている。

欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。

Valletta



Coordinator 宮原 あき子 AKIKO MIYAHARA

横浜市出身。香港、ロンドンのライター時代に取材先で訪れたゴゾ島に惹かれて移住。在任歴18年。留学生のコーディネート業を中心に、アーティストの留学プログラムIAM(<https://www.iampmalta.com>)を主宰。マルタへ日本文化を紹介するNGOマルタ・ジャパン・アンシエーション会長。

Photo マット・ハッシュ MATT HUSH

英国出身。欧州文化首都ヴァレッタ2018の公式フォトグラファー。英国の大手新聞の旅行写真を手掛け、日々世界中で写真を撮るロンドン時代を経て、家族中心の生活拠点としてゴゾ島へ移住。ハッシュ・スタジオを運営、コマーシャル商品から人物まで丁寧な撮影に定評がある。

激動の歴史を語る 中世の城塞都市 ヴァレッタ

盛衰を辿る洋上の首都

ヴァレッタは地中海に浮かぶ島国・マルタ共和国の首都で、国の政治経済の中心地。1565年の大包囲戦後、オスマン帝国の再攻撃に備えて聖ヨハネ騎士団が新たに本拠地として建設した城塞都市だ。今なお約6,000もの人々が暮らすこの街には、多くの歴史的建造物が建ち並び、1980年には街全体がユネスコの世界文化遺産にも登録されている。古くから首都であったヴァレッタは、イギリスの植民地であった第二次世界大戦以前

は歓楽街などもある賑やかな街だった。しかし、大戦中は激しい戦禍に巻き込まれたため、港湾労働者など一部の貧しい層を残して人々は街の外に移り住んでしまう。1964年にマルタがイギリスから独立、1974年に君主制から共和制に、1979年にはイギリス海軍が完全に撤退したことで、彼らと仕事をしていた人々の居場所もなくなり、ますます人の流出は加速していった。この頃から、ヴァレッタは名目上の首都機能を有するのみで、必要なときだけ訪れ、日が暮れると誰もいなくなるようなゴーストタウンの様相を呈するようになる。その凋

過渡期を迎える世界遺産の街

「すべての人がアクセスできる文化」をスローガンに、「文化」が上流階級のものだけという概念を打ち壊すことが一番の目的だったと、Valletta2018組織委員会の後継団体“Valletta Cultural Agency”のチェアマンであるジェyson・ミカレフ氏は力強く語る。

マルタの人々のコミュニティのコアとなっているのが、フェスタと呼ばれる夏祭りだ。マルタの人たちはそれぞれ自分の住むエリアの教区に属しており、「自分たちの教会のお祭り」がコミュニティを繋げる役割を果たしている。ヴァレッタにも4つの教区があり、通常はそれぞれ異なる時期にフェスタが催されるが、2018年はそれらの教区を一堂に会して半島全体のフェスタが開催された。Valletta2018のプログラムの目玉の一つ、『フェスタ・クビーラ』だ。

人々のコミュニティや生活の基盤である「教区」という文化の垣根を超え、ヴァレッタ全体でのフェスタに一丸となって取り組んだことは、多くの市民を巻き込み、彼ら

の心をつなぐという意味でも、とても重要なプログラムであった。

Valletta2018が他国の欧州文化首都と決定的に異なる点は、マルタ自体が小さな島国のため、その影響が国中に波及することにある。これまでアートや文化といったものが自分たちとは関係のないものであると認識していた人たちが、自分たちの生活もまた文化なのだ気づききっかけになったであろうことは、非常にポジティブな効果と言える。

一方で、Valletta2018のレガシーを後世に引き継ぐためには、街のネガティブな側面にも目を向けなければならない。最も顕著なのが、ジェントリフィケーションによる不動産価格の高騰だ。若い世代がヴァレッタで居を構えるのが難しくなっており、諸外国を含む外部の人間が建物を購入して商業化することで、従来静かだったエリアの生活が脅かされる事態となっている。建物を改装する工事の埃や騒音、レストランやバーの喧騒に加え、住民の駐車スペースが少なくなっていることも問題として挙げられる。街全体が世界遺産に登録されているた

め、建築に関する規制も多い。元々起伏の多い地形であることに加え、エレベーターの設置にも限界があるため、高齢者には生活しづらい環境であることも今後の課題となるだろう。

Valletta2018の決定から開催まで、6年間の経験を引き継いだValletta Cultural Agencyが、未来のヴァレッタをキュレートし、住民にとっても来街者にとっても、ヴァレッタが魅力的な街として在り続けていくことを期待したい。



ヴァレッタ住民の話を題材にした市民劇“Gewwa Barra Project”を手掛けたヴィクター・ヤコノ氏。ヴァレッタの移り変わりについて話してくれた。



『Re』Vol.1を手にとる取材を受けるマイケル・デグアラ氏(左)。マルタ大学のリサーチチームの一人であり、ヴァレッタの歴史や欧州文化首都が街に及ぼす影響について話してくれた。

Leaders of Valletta Cultural Agency

今回取材したValletta Cultural Agencyのメンバー



Chairman

ジェyson・ミカレフ氏



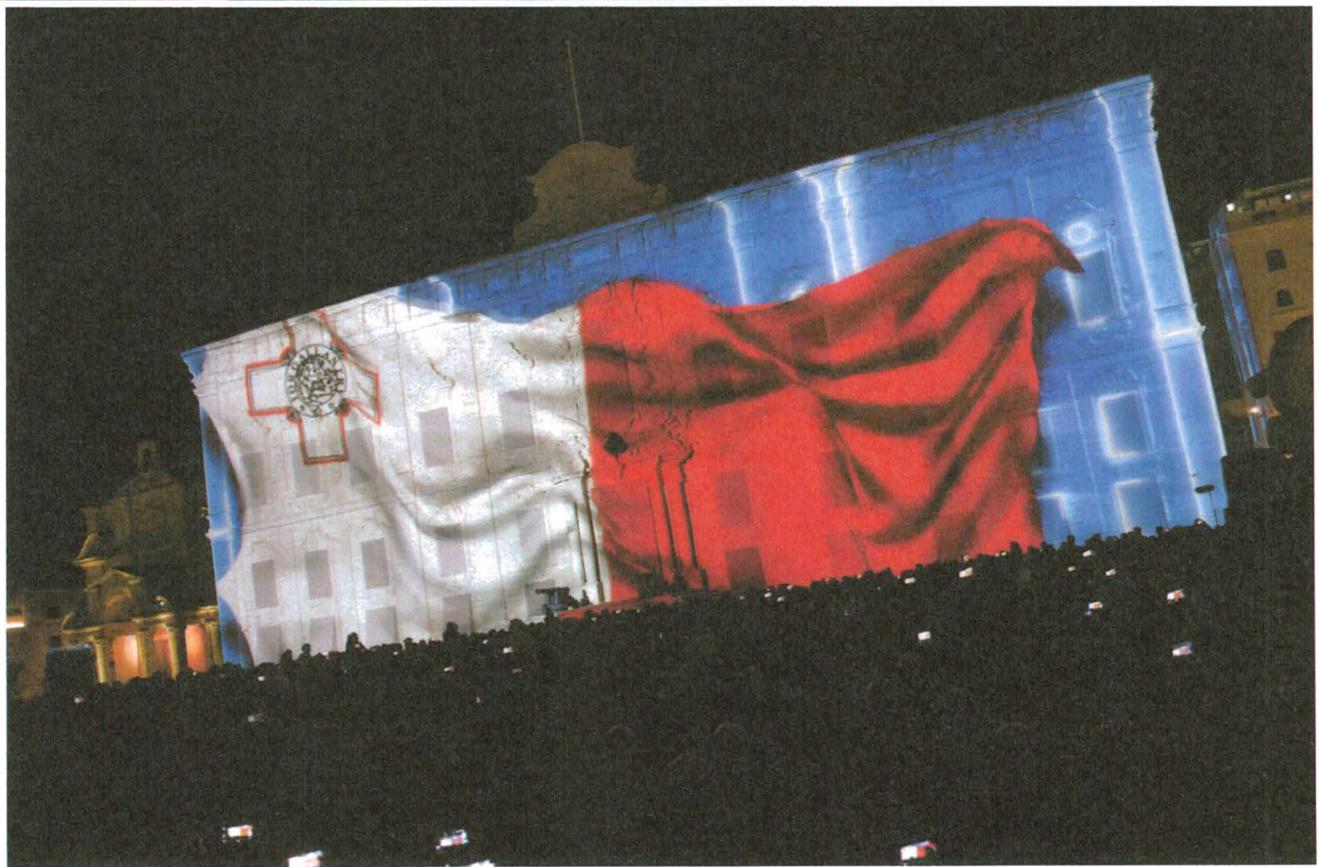
Chief Executive Officer

キャサリン・タボーネ氏



Head of Programming & Production

ジョアンヌ・アタード・マリーア氏



上：Valletta2018プログラムの目玉の一つ『フェスタ・クビエラ』
下：Valletta2018『オープニングセレモニー』

欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。

Projects with Everlasting Legacies

Valletta Design Cluster

01



Valletta Design Cluster Manager
カルドン・メルチーア氏

Valletta2018のプロジェクトには、日本人が関わっているものも少なくない。その中の目玉の一つと言えるのが、“Valletta Design Cluster”だ。およそ400年もの歴史を持つ政府所有の建造物のリノベーションプロジェクトで、2020年の完成を予定している。

2010年頃、アートやデザイン系の学生が卒業後に活動を続けていく場がほとんどないという状況を受け、そういった人たちが自分たちの活動を気軽にシェアできる環境や、ビジネスの場にいる人とのコネクションを深めることなどを企図して計画されている。

MUZA

The Malta National Community Art Museum

02



MUZAのキュレーター
ケネス・カッサール氏

「かつては美術館に足を運ぶ人間と言えば、地元のアート関係の人が、観光で訪れた外国人がほとんどだった」と、MUZAのキュレーターであるケネス・カッサール氏は語る。

MUZAは、前身であったコンテンポラリーミュージアムの所蔵品をベースに、「アートはそこに住む市民を反映するものである」という解釈から、周辺住民参加型のキュレーションを試みるなど、「開かれた美術

The Strada Stretta Concept

03



The Strada Stretta Conceptの仕掛人
ジュゼッペ・シュケンブリ・ボナーチ教授と
教え子であるニッキー・ペトロニ氏
ストレートストリートにて

ヴァレッタを散策すると、狭い路地にひしめくテーブルで人々が食事を楽しみ、ときに路上でパフォーマンスが催される、ひとときわディープな通りに出くわすだろう。海から丘の上まで伸びる一筋の道、「ストレートストリート」だ。

ここはヴァレッタが500年近く前に誕生してから、いわゆる赤線地帯、もしくは劇場などが多いエンターテインメントの通りとして歴史を刻んできた。かつての音楽家などアーティストにとっては、カルチャーの中心というより、「あそこで演るのはクールだね」などと語られる、そんな場所。

Valletta2018のプログラムは基本的に一過性のものだが、
ここではレガシーを後世に受け継ぐための永続性のあるプロジェクトを紹介する。

建物は海にほど近く日当たりのいい場所にある二棟構成の二階建て。1階にはミーティングルームやシェアオフィス、レストラン、展示場や工房などの共用スペースが入る。2階は15区画のワークスタジオが計画されており、今後アーティストインレジデンスとしての公募を行っていく予定だ。

建物の歴史は古く、元々は屠殺場として建てられたものだが、その後ペーカーリーとして使用された時期もあり、その時代の名残であるパン焼き窯のいくつかは今回の改装でも保存される。アーチ構造を駆使して建物が支えられており、レセプションへ向かう

動線の頭上では増改築された時代ごとに径の異なるアーチ構造を確認できるのも趣深い。

忘れてはならないのが屋上スペースで、「多くの人々が憩うことのできる庭園」という近隣住民からの強い要望を受け、日本人建築家・近藤哲雄氏がデザインを担当。この屋上庭園には、水場や子供の遊び場、ワークショップができるような広場空間、オープンシアターなど様々な用途が計画されている。住民の要望が高度なレベルで現実となる変化を通じて、都市が共創の場になり得るという未来を指し示す好例と言える。



© Valletta Design Cluster

Valletta Design Cluster 完成予想CG
日本人建築家・近藤哲雄氏が屋上庭園のデザインを担当

館」を目指したコミュニティアートミュージアムだ。心理的なアクセシビリティを重視し、美術館のある建物の入り口を二ヵ所に設けてその間を公共スペースとすることで、往来する人々に「こんなところに美術館があるなら入ってみようか」と思わせることも意図している。

キュレーションに参加することで、周辺住民がMUZAを自分たちのプロジェクトであることを意識し、ヴァレッタが実は文化の宝

庫なのだということが少しずつ浸透してきたのではないかとカッサール氏は考える。

欧州文化首都を経たヴァレッタでは、美術館のエキシビジョンだけでなく、屋内外でのパフォーマンスをはじめ様々な文化へのアクセスポイントが芽生えている。マルタの人々も、自分たちが文化を発信する機会が増えたことで、マルタのアイデンティティとは何か、マルタらしさを見つめなおすきっかけになったのではないだろうか。

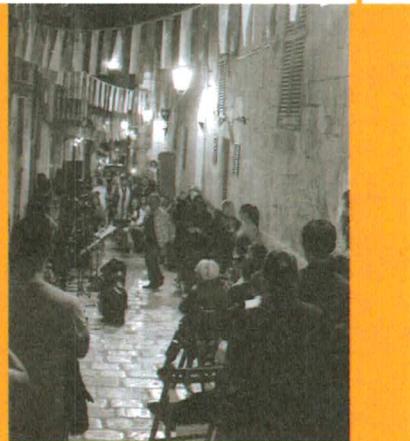


MUZAの建物内部の様子中庭のある空間は通り抜け可能で、カフェレストランも設けられている

1970年代、ヴァレッタの衰退に伴ってこの通りも廃れてしまったが、90年代に通りのボヘミアンな文化を再興したいと考え始めた人物がいる。自身もこの通りの出身で、マルタ大学でアートヒストリーの教鞭を執るジュゼッペ・シュケンブリ・ボナーチ教授だ。彼は自分の教え子たちも巻き込み、オペラや文学などクラシカルなアートカルチャーをただ模倣するだけでなく、自分たちの解釈で自由に再構築し、通りのレストランやバーで上演する“The Strada Stretta Concept”という活動を続けてきた。Strada Strettaとは「狭い道」を意味し、文字通りこの狭い通

りを舞台に様々なパフォーマンスが繰り広げられる。2015年から2018年までに取り組んだイベントは約270にも達し、そのいくつかはValletta2018の公式プログラムにも組み込まれている。

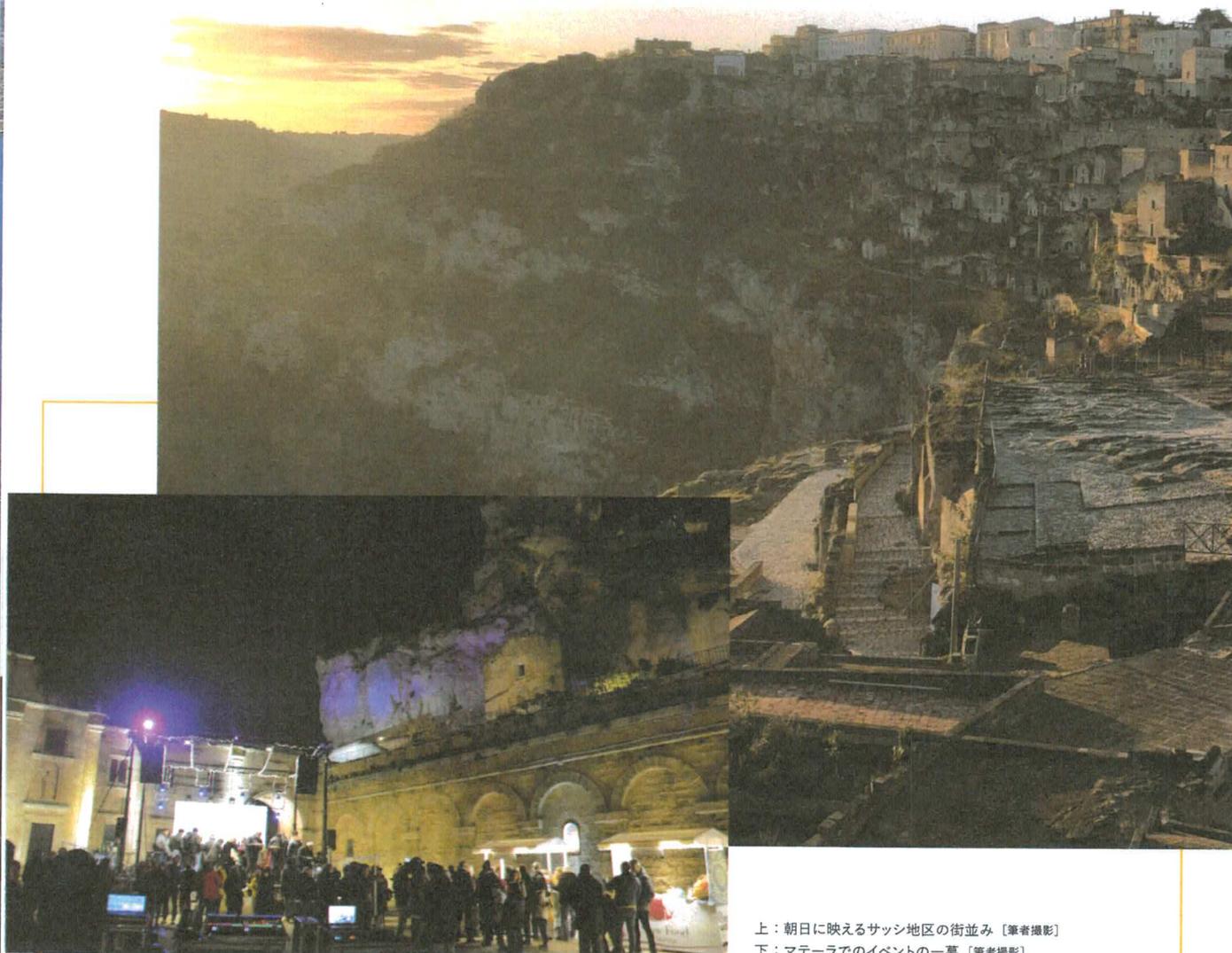
オペラ・文学と詩・音楽を三本柱として、「文化とは高尚なものばかりでなく身近なものである」という考えのもとストリートアートとして再解釈し、夜ごとパフォーマンスが行われるこの通りでは、人々が自由に語り、心地よい風が流れている。



イベントの様子
〔The Strada Stretta ConceptのFacebookより〕

欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。

Matera

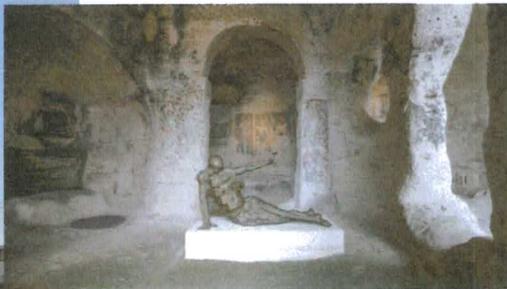
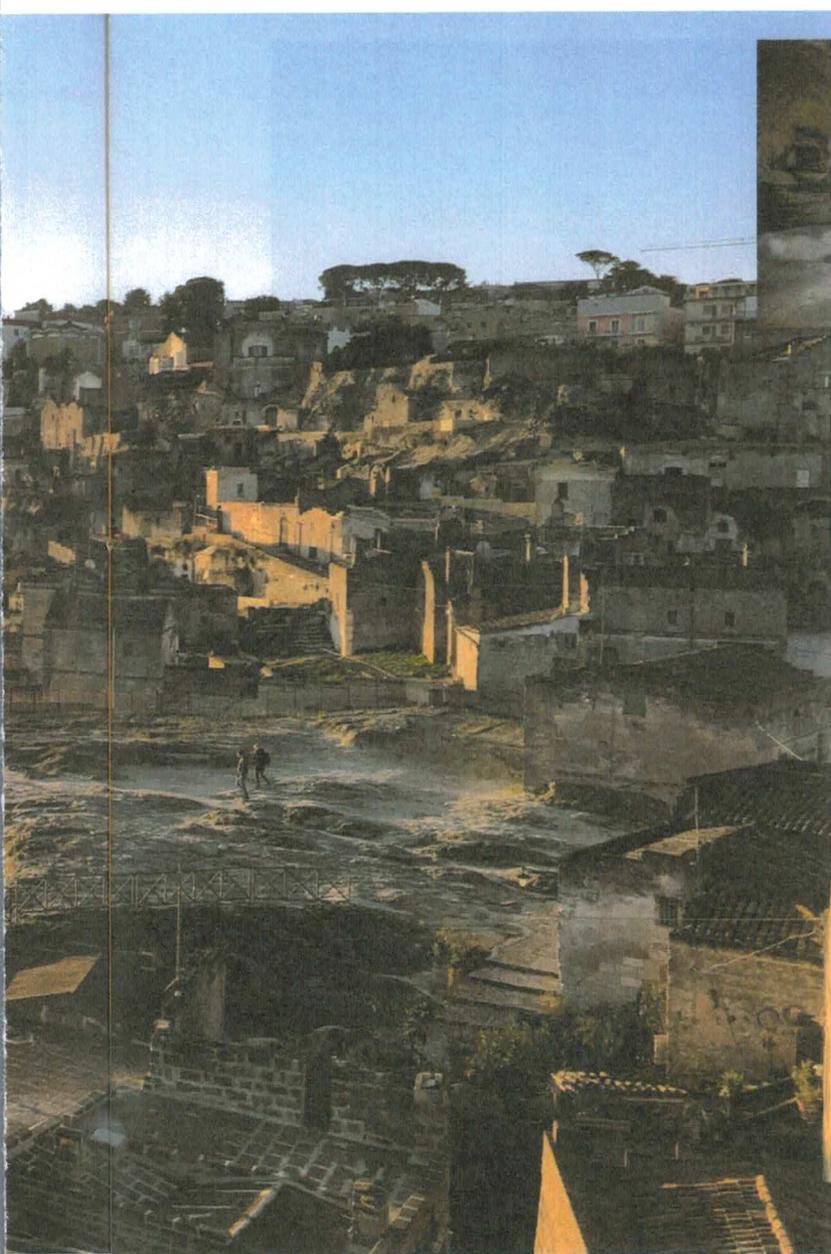


上：朝日に映えるサッシ地区の街並み【筆者撮影】
下：マテラでのイベントの一幕【筆者撮影】

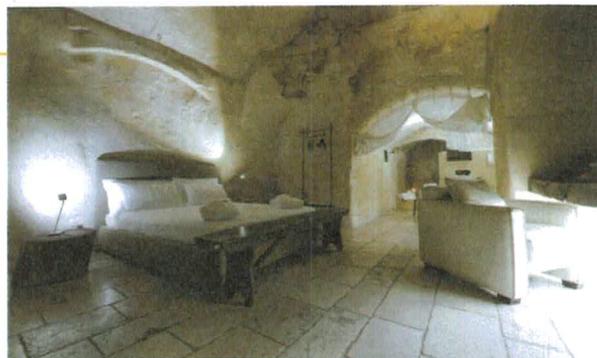
いにしへの洞窟住居を舞台に 連綿と続く人々の営み

「イタリアの恥」の新たな息吹

訪れた誰もがその景観に息を飲む街、マテラ。この街の特徴は、何と言っても「サッシ」と呼ばれる洞窟住居群にあるだろう。渓谷に無数に存在する洞窟がいつ頃から使われていたかは諸説あるが、かなり古い時代から人々の営みがあったものと考えられており、新石器時代には最初の集落が



Matera2019の公式プログラムではないが、岩窟教会を舞台に大規模なダリ展が催されていた。超現実的な空間にダリの作風が馴染む。



洞窟住居をリノベーションしたホテル“Corte San Pietro”
ガラスの天板から零れる光は、Matera2019のプログラムでもある
貯水槽インスタレーションのもの。

できたとされる。

歴史の重みを感じる耽美的な空気が魅力的なマテラだが、実のところ、サッシ地区は、誰もいない廃墟同然の時期もあった。20世紀初頭ごろより人口が急速に増加したことにより、元々は畜舎として使われていたような洞窟も住居として使われるようになったことで、衛生状態が極めて悪化。流刑の身として近くの村に住んでいたカルロ・レーヴィが自身の著書でその惨状を描いたことで、悪い意味で注目されることとなる。行政としてもこういった状況を見逃さず、1952年には法整備が行われ、サッシ

住民は市内や郊外に建設された住宅に強制的に移住させられる。その結果、サッシ地区は無人の廃墟と化してしまう。しかし近年、数多の洞窟住居や岩窟教会をはじめとする歴史遺産や、洞窟の貯水槽を活用した上水供給システムなど、そのユニークネスが見直され、1993年に南イタリアで初めての世界遺産に認定される。これに伴いサッシの再生も進み、現在では住居やホテルからスパに至るまで、様々な用途で再利用されている。今では地価も高騰し、マテラ市民がサッシ地区に住みたいと思っても簡単には住めないほどだ。

Coordinator

白旗 寛子 HIROKO SHIRAHATA

1974年生まれ。2003年からマテラ在住。イタリア人の胸を借り、南イタリア広域にて、取材および番組コーディネーター、通訳・翻訳、日本語・伊語で執筆ほか。h.shirahata@virgilio.it

Photo

ドメニコ・フィッティパルディ
DOMENICO FITTIPALDI

マテラ出身。2011年からレポルターージュおよび風景写真家。fittipaldiphoto@gmail.com

欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。



Matera2019 グランフィナーレの様子。会場の“CAVA DEL SOLE”は、欧州文化首都の開催に向けて昔の石切り場をリノベーションした多目的ホールで、屋外ステージにはおよそ6,000人を収容可能。

加速する意識の変化

Matera2019の開催に至るまでの道のりは、まるでマテラアの地形を象徴するかの如く険阻であった。

イタリア国内で欧州文化首都への公募が始まった2012年、ヴェネツィアなどの有力候補も含む21もの都市が立候補したが、その中でもマテラア市民は文化首都の招聘にかなり積極的だったとされる。2014年10月に開催都市の発表を中継していた広場には4千人もの人々が集まるなど、決定時の歓喜に沸く様子はYouTubeでも確認できる。

(2020年9月時点)

しかし、そのわずか半年後にはマテラアの

市長が変わってしまい、新しい市長の考え方に合わず、2年間ほど何も進められない状況が続いた。結果、本格的に準備を始めたのは2017年以降となる。しかし、そのような状況でも、当初提案していたプログラムをほぼ全て実現までこぎつけたのが実にイタリアらしい。Matera2019実行委員会のエンマヌエーレ・クルティ氏も、「イタリア人は計画通りに動かないが、ストレスがある方が高いパフォーマンスを発揮して締め切りには必ず間に合わせる。私自身もなぜ間に合ったのかわからない」と笑う。マテラアが属するバジリカータ州のコミュニティ全体を内包したプログラムであること。また、多くのプログラムがマテラアオリジナ

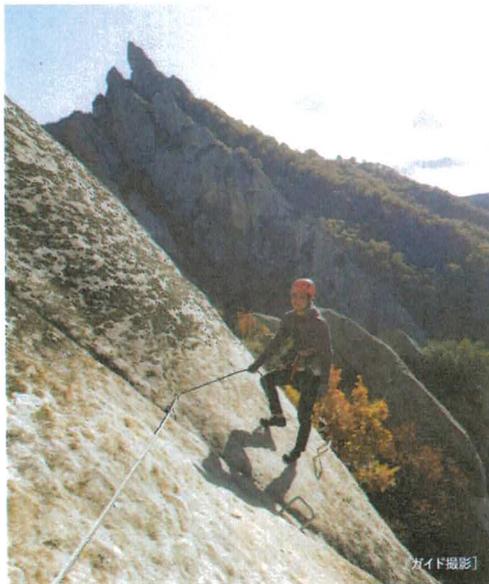
ルで、市民と一緒に作り上げていくこと。これらを徹底的に意識していることがMatera2019の大きな特徴と言える。市民を巻き込んだ演劇やオペラなどの公式プログラムはもちろん、オフィシャルサイトでは市民が自主的なイベントを登録・発信することもできる(取材時)という。

市民の意識の変化を定量的な数字で見えることは難しいが、子供から高齢者まで、多くの市民がボランティアとして参加していることは、自分たちで街を魅力的にしていきたいという意識を持つ人がそれだけ存在することを意味する。また、数年前まではマテラアから出ていく若者が多かったが、現在は逆に戻ってくる現象も起きている。過去3年比較での観光宿泊者数の増加率が欧州文化首都史上(イタリア国内でも)最も高かったことも、Matera2019の大きな功績の一つだ。実行委員会としても、街が一年間の開催期間で変わるわけではなく、イベントを実施しているというよりも日々新しい経験を積んでいる感覚だという。彼らの今後の課題は、この一年での成功体験を、如何に今後に引き継いでいくかということに尽きるだろう。

COLUMN 01

小ドロミティでヴィア・フェッラータ

せっかくマテラアを訪れたので、周辺の美しい村にも足を延ばしてみた。マテラアから車で一時間ほどのカステルメッツァーノは、イタリアの最も美しい村のひとつにも数えられる山間の小さな村だ。バジリカータの小ドロミティとも称される険しくも美しい景観が、旅の疲れを癒してくれた。筆者がここに来た目的は、ヴィア・フェッラータと呼ばれるアクティビティだ。安全確保した状態で切りたった崖を登る感覚は爽快この上ない。一般的な日本の登山とは毛色の違った体験ができるが、ルートが少し複雑なことから、若干ながら危険も伴うため、ヴィア・フェッラータにチャレンジする際はガイドの同行をお勧めする。



ガイド撮影]

Matera2019 実行委員会
エンマヌエーレ・クルティ氏

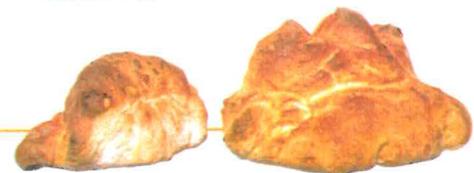


Photo ©Parole Ostili

COLUMN 02

IGPに
登録されている
「マテラアのパン」

IGPとは伝統的な食品の品質を保ち保護するための制度で、原材料の産地から細かい製法まで、生産地域・生産国・EUの順で審査を経て認定される。「マテラアのパン」以外のパンが「マテラアのパン」という名称を使えないよう保護されている。



欧州文化首都を経て、変貌を遂げる街。

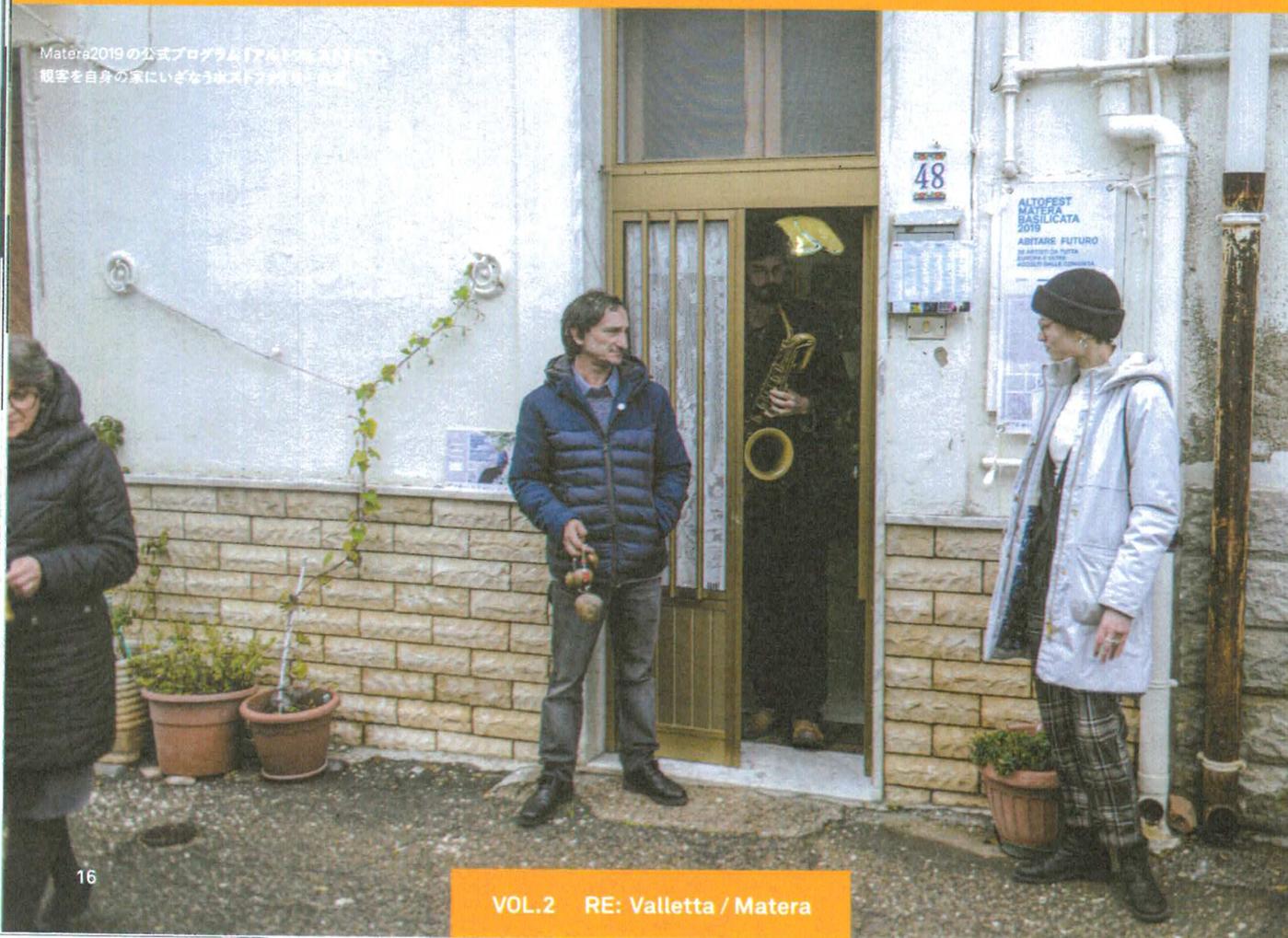
Cities of Awareness

グラスルーツな活動で、
都市に「気づき」を。

ヴァレッタとマテラ、二つの都市に共通するのは、欧州文化首都を都市再生のカンフル剤とすることはもちろん、「文化」は高尚なモノではなく、全ての人の身近にあるということを徹底して市民に意識してもらおうと取り組んでいたことだ。

『アルトフェスト』というプログラムがある。ナポリを拠点とする複合芸術で、ヴァレッタとマテラ双方において欧州文化首都の公式プログラムに取り入れられている。アーティストがホストファミリーの自宅に泊まり込み、およそ2週間にわたって共同でパフォーマンスを創り上げ、家庭の日常的な生活空間で上演するという、とてもユニークなプロジェクトだ。これまでアートとの関わりの薄かった家族の日常が(半ば強

Matera2019の公式プログラム『アルトフェスト』で、
観客を自身の家にいざなうホストファミリーの家。



制的に) 創造的な空間になるのは、かなりの衝撃であろう。

アーティストの日常的な存在は、パフォーマンスをホストする家庭の意識にも容易に影響する。例えばヴァレッタでのアルトフェストの一つの演目として、『デイリーシェイクスピア』というオペラのプログラムが上演された。鉄鋼業に従事する人がホストファミリーを務めたが、彼自身も裏方として重要な役割を担い、パフォーマンスが自分の家で開催されることに対し、とても自慢気だったという。

マテラ訪問時、幸運なことに筆者もアルトフェストの演目の一つを体験することができた。マテラ近郊のグラッサーノという村の民家で催された、音楽と身体表現の

複合パフォーマンスだ。時間になると民家の扉が開き、一人の男が鈴のようなものを鳴らしながら現れた。続いて別の男がサククスを吹きながら登場し、家の前でしばらく吹いた後、再び中に戻っていく。鈴の男がオーディエンスを誘導するかのように家の中に引き連れ、今度は裏手に出たかと思えば、そこにはパーカッショニストとダンサーがいて、そのままパフォーマンスは続いていた。実はこの鈴の男こそ、民家の主である。パフォーマンス自体も緊張感があり楽しめたが、やはり感銘を受けたのは、一家族の生活空間をステージとして創造的な体験を享受できたことにある。

アルトフェストの例だけでなく、取材の節々で感じたのは、双方の都市が「アートや文

化がすべての人の身近にあるものだと感じてもらおう」ことを目指しており、人々もまたそのような意識の途上にあるということだ。欧州文化首都という契機を経て、ヴァレッタとマテラは人々が文化に触れることへの意識上のハードルを下げ、言わば“Cities of Awareness”へと変貌を遂げた。日本での文化政策というと、トップダウンによるインフラ整備などが思い当たるが、こういった草の根的な活動こそが、人々がお互いのアイデンティティを尊重し、多様性に寛容な社会を目指す上では必要なことではないだろうか。

2週間を共に過ごしたアーティストとホストファミリー。パフォーマンスが終了すると、賓客も家の中に戻り入り、食事や飲み物が振舞われた。



RE: Discuss

Valletta / Matera

2018、19年
欧州文化首都開催地の
ヴァレッタとマテラについて
都市ラボメンバーで座談会。

「Awareness=気づき」の象徴、 アルトフェスト

太田あ：今回のキーワードは「Awareness=気づき」です。

本文中の「自分たちの生活もまた文化なのだ」と気づききっかけになった」という箇所が、キーワードの元となった部分ですが、開催都市の「自分たち」が文化に「気づく」ことが、欧州文化首都の一番の肝だと思えます。文化・芸術は生活必需品ではなく、なくても生きていけるものですが、とてつもない力を擁するということが、欧州文化首都のコンセプトのベースにあると思います。その現場を2都市で見えてきたわけですが具体的に体験談を聞かせてください。

永山：マテラで観た「アルトフェスト」というイベントが、最も「Awareness」であったと言えます。

私が見た演目はマテラから車で1時間くらいのグラスサーノで催されたのですが、正直「ここでやるのか?」と思える環境でした。名所でもなく、人もまばらで、霧も出ていて

…。金曜日の昼間で、何の変哲もない民家の前にちょっとした人だかりが出来ていて、ほどなくしてジャージ姿のダンサーがパフォーマンスを始めました。民家の広間や住宅の裏手の中庭のような場 [写真1] でパフォーマンスが行われ、そこに隣家の人が車で帰ってきてしばし鑑賞し、また車で出掛けるシーンがあったり、本当に日常の風景に異質なものが紛れ込んでいる感じが面白かったです。アーティストが民家に泊まり込み一緒に演目を作るそうで、当たり前だと思っていた生活・文化に新たな光 (気づき) を当てる印象的なプログラムでした。今回の特集を象徴していると思ったので、最初の見開きにもその様子を掲げました。

変わる欧州文化首都

太田ひ：今回の欧州文化首都に合わせて、マテラではなにか箱モノは作られたのでしょうか。例えばフランスのマルセイユだと美術館が作られ、古くはグラスゴウのコンサートホールの建設など、今までだと大体箱モノがフラッグシッププロジェクトとしてありました。



[写真1] グラスサーノで行われていた「アルトフェスト」のプログラム。



La Machine [La Spider] photo by Peter

[写真2] 2008年の欧州文化首都リヴァプールで催されたラ・マシンのによるスペクタクル。

永山：駅は一つ造られましたが、他は既にあったもののリノベーションが多いと思います。箱モノが少ないと、アートの定番としてある風景を変えるということが難しいですが、ハード的な投資は意図的に避けられているようにも見えました。

太田ひ：箱モノで風景を変えるのではなく、スペクタクル (見世物) で変えるというやり方がありますね。リヴァプールの時は、ラ・マシンの来て大がかりなスペクタクルをしていました。[写真2] ヴァレッタでもラ・フラ・デルス・バウスがやっています。マテラはそういうものよりも、ジワッと地域を変えるようなアートなどをグラスルーツ的にやっていますね。

永山：大がかりなスペクタクルで外から人を呼び込むよりも、都市に住んでいる自分たちが変わろうという意識の方が強いのかもかもしれません。確かにプログラム全体に華やかさはありませんでした (笑)。そのかわり一つが濃密でした。

太田ひ：欧州文化首都は1985年から開催され、もう35年目ですが、随分変わっているんですね。スペクタクルで住民参加を促すのではなく、敷居の低い方法で参加を呼びかけているように見えます。

深見：コンティニューもマテラの欧州文化首都のテーマです。派手ではないですが、続けられそうなプロジェクトばかりですね。



[写真3] オフスの市民ボランティアプログラム「ReThinkers」。クルーズ船で来た海外の観光客をもてなす活動などがシビックプライドにつながっている。

太田あ：マテラ方式なら、日本の地方自治体でもできるのではないかと思います。箱モノや大がかりなスペクタクルだとハードルが高いですが、グラスルーツ的なマテラ方式は敷居も低く、継続性があるのではと。これまでの欧州文化首都で、どれだけ継続プログラムが残っているか調べてみたいですね。

水本：ちなみに、2017年の欧州文化首都であるオフス（デンマーク）で結成された、市民ボランティアプログラム「ReThinkers」を昨秋取材して来ましたが、今でもVisitAarhus（オフス観光局）の下でしっかり活動していました。[写真3] 外からの目を通して自分のまちを客観的に見ることによって、市民の意識がかなり変わるようです。自分たちの都市の魅力を再発見し、愛着と誇りが生まれる。シビックプライドの視点で見たときに、欧州文化首都は良いイベントだと思えます。

太田あ：日本でこういうことをやる場合に難しいのは、どういう風に住民を巻き込むか、ということですね。欧州文化首都と日本のアートイベントとの大きな違いは、まず開催を自分たちで勝ち取るところから巻き込まれている点ではないでしょうか。欧州文化首都は、EUの中でまず国が選ばれ、次に国の中で都市が立候補する。それでマテラは自分たちで勝ち取ったわけです。

永山：地元のお祭りに相乗りし、住民を巻き込む方法もあると思います。ヴァレッタの「フェスタ・クビーラ」は、通常教区ごとに別々にやっていた祭りを一度にやろうというイベントで、住民が欧州文化首都へ参加するきっかけにもなっています。内輪だけでなく外部からの刺激を取り入れるのも大切だと思います。外からアーティストがきて一緒に活動する、その中で自分たちのことに気づかせてくれる。あえて異質なものを入れ、淀んでいたものを攪拌し、新しいものを生み出す感じ。そこには内輪でやっていたときとは違う気づきがあります。

エンパワーメントと分散協調型の時代

小林：今、「当事者デザイン」についての論文を読んでいるのですが、通じる部分があると思いました[※1]。デザイナーの新たな役割について論じたものです。元々はプロとして最適解を提供するのがデザイナーの仕事でしたが、時代に応じてコミュニティを先導し共創していくあり方が生まれ、さらに近年ではユーザーによる主体的な創造へと導くコーチング的なあり方が生まれているそうです。そこでは「エンパワーメント」がキーワードになっています。権限移譲、みんなが自信を持ち、デザインすることを通して自立に向かっていくという。

太田あ：企業経営や教育の現場でも、そのような流れがありますね。

小林：「当事者デザイン」にはもう一つ面白い視点があって、エンパワーメントやコーチングは、「持続性」が前提だそうです。欧州文化首都自体も変わってきているのは、今は持続性を前提とする時代になったから、テーマや方針も変化してきたのかなと。時代の潮目が変わってきているのかなと思います。

大屋：ヒーロー像にも変化があるそうです。以前の悪を倒したりトラウマを乗り越える象徴的なヒーローから、今はアベンジャーズのように「みんな一緒に頑張ろうぜ」と、共に強くなるエンパワー型ヒーローへ。だからアーバンヒーローもエンパワー型に進化しているのではないかと思います。

太田ひ：最近の都市デザインにも同じ傾向があります。以前は都市デザイナーがいて、マスタープランを元に全体像を調整していました。でも最近は、みんながそれぞれのプロ

ジェクトで咀嚼して自己調整的にやっている。何がそれを可能にしたのかと考えていたところ、PDFではないのか、と気づきました。つまりネット上の共通のアジェンダをみんなが見ながら動けるようになってきている。情報の中央集権から分散協調型になってきていて、それが実社会でも浸透し始めているのではないかと。

西村：次号の取材のために、九州大学の黒瀬武史先生に伺ったデトロイトの話もまさにそうでした。縮退都市の都市デザインは始めにマスタープランありきではなくて、まず市民が空き地をうまく活用する事例や、自分たちで地域の再生計画を作ろうというタクティカルなアクションがあり、行政はそれをすくい上げて仕組み化したり、俯瞰的なマスタープランとして整えるという流れです。

最後に

太田あ：最後に改めて、「Awareness」の意義とはなんでしょう？

永山：気づくことにより、自分の生活も他者の生活も文化として考え、多様性に対し理解が深まるということなのではないかと思います。「文化の相互理解」は欧州文化首都が当初から掲げるキーワードです。

もう一つは、受け身であることが多かった住民が、アーティストが歩み寄ることでエンパワーメントされ、当事者となりデザインに関わっていく。その過程において、住民を当事者へと変えるのが「Awareness」ということです。このような能動性が高い活動は、新たな深い結びつきを住民の間に残すのではないのでしょうか。それが、継続性を生むのだと思います。



都市ラボのメンバー。(左から) 大屋、西村、太田(浩史)、永山、太田(あゆみ)、小林、深見、水本

[※1] 日本デザイン学会2017 秋季企画大会テーマ討論会「共創・当事者デザイン」補足資料『当事者デザインをめぐる枠組みについて』（専修大学 上平崇仁教授）



RE: View

欧州文化首都と ひとりひとりの変化

太田浩史 [株式会社ヌーブ]

ヨーロッパの街を訪ねるなら、欧州文化首都を狙うに限る。すばらしい空間と、都市の喜びと、大胆な実験を見ることができるからだ。そう思って、私はこれまでリヴァプール(2008)、リンツ(2009)、エッセン(2010)、マルセイユ(2013)の欧州文化首都を訪ねてきた。年の始めに発行されるイベント一覧を読み込んで、見るべきスペクタクル、アートを決め、旅程を組んで、友人を誘う。密度の高い欧州文化首都の経験を、一人占めにするのはもったいない。欧州文化首都を特徴付けるのは、投資である。たとえば最大規模の成功事例と評価されたリヴァプールの場合、合計で40億ポンド(=当時のレートで6400億円)もの投資があったとも言われている。これまで巨額な理由は、文化首

都事業だけではなく、8年にわたるリヴァプールの都市再生関連費を含んでいるからで、主会場のアリーナや美術館だけではなく、ショッピングセンター、オフィス、ホテルなど、文化首都によって本当に大きな変化が街にもたらされた。イベントで浮かれたいのと同時に、建築も都市再生も見たい私にとっては、その両方が見られる欧州文化首都は実にお得な機会である。実際に、リンツのアルス・エレクトロニカ改修、エッセンのルール博物館、マルセイユの地中海文明博物館など、欧州文化首都に合わせてつくられた建築には、その文化的野心に感動させられるのである。建築本体だけではなく、そこへと至るシークエンス、眺望点から見渡される景観についても、丁寧に整備されるからである。こうした



大規模な面的整備は、一年にわたって都市のイメージが発信される欧州文化首都ならではのものなのだろう。

さて、こうした華やかな舞台づくりの一方で、欧州文化首都は開催都市の産業構造を変える重要な機会として捉えられてきた。かつて貿易港として繁栄したものの、コンテナ船の台頭と貿易航路の喪失により、海事産業と加工業を失ったリヴァプールは、まさにその代表例である。たとえばビートルズの親の世代、ジョンとジョージの親は船乗りで、ポールは綿花商。リングの親は菓子職人だったけれども、リング自身が船に乗った。1940年代にリヴァプールに溢れていた貿易関連の雇用は1970年代に壊滅的となり、貧困が街を覆ったのである。市民が取るベ

き道は、まさにビートルズが示したふたつの道しかなかった。街を去るか、文化に賭けるか、である。

そのような背景もあって、欧州文化首都には、文化を基軸に都市をポスト工業時代の都市へと再生させようとする必死の努力が込められてきた。炭坑と鉄鋼で栄えたエッセンしかり。アフリカ貿易の玄関港だったマルセイユしかり。造船業の衰退によってイギリス最貧の都市となり、1990年の欧州文化首都によって蘇ったグラスゴーしかり。こうした伝統のなかで、低スキルの労働文化から脱却し、付加価値の高い新しい産業をつくる手法が育ってきた。欧州文化首都の華やかなスペクタクルの裏では、市民向けの無数のワークショップ、職業訓練、傷ついたシビック

プライドの回復が重ねられてきたのである。本特集で挙げられたヴァレッタとマテラは、リヴァプールやグラスゴーなど旧工業都市のケースとは背景が違うものの、文化政策・社会政策としての欧州文化首都の特色が、やはり強く表れている事例である。大規模開発によって都市が一新された様子を発信するというよりも、市民ひとりひとりの変化に焦点を当てるプログラムが目立つから、EU域内の文化的発展という当初の目標に回帰しつつあるのかもしれない。マテラのアルトフェストは私も見てみたかった。コロナ禍が明けたら、今年と来年の文化首都をしっかりと見てみよう。



企画・編集

株式会社読売広告社

都市ラゴ

水本宏毅／太田あゆみ／西村真／
小林亜也子／永山友也／関川卓也／
大屋翔平／深見恵理

監修

太田浩史（株式会社ヌーブ）

デザイン

TAKAIYAMA inc.

—

発行

2020年11月

発行者

株式会社読売広告社

東京都港区赤坂5-2-20

tel: 03-5544-7223

e-mail: toshi-lab@yomiko.co.jp